

2025 年度
関西学院初等部

学校評価を終えて

本校は、関西学院の建学の精神であるキリスト教主義に基づき、「世界市民の育成」と「全人教育の基礎づくり」を使命として歩んでいます。私たちが大切にしている“Mastery for Service”の精神は、単なる知識の習得にとどまらず、他者に仕え、社会に貢献する姿勢を生涯にわたって育むものです。その実現のためには、児童一人ひとりの成長を支える教員の指導力向上、そして保護者の皆さまとの協働が欠かせません。学校評価は、その取り組みを客観的に見つめ直し、教育の質をさらに高めるための重要な機会となっています。

2025 年度は、「キリスト教主義教育」「教育課程・学習指導・学校行事」「生活指導」「研修（資質向上の取り組み）」の4つを重点分野として設定しました。評価にあたっては、児童・保護者・教員を対象にアンケートを実施し、多様な立場からの意見や期待を丁寧収集しました。こうした多角的な視点は、学校が抱える課題や強みをより正確に把握するうえで大きな力となっています。

集まったデータは教職員が時間をかけて分析し、各重点分野における取り組みの進捗や成果を確認しました。そのうえで、改善すべき点を明確にし、次年度に向けた具体的な改善計画を策定しています。自己評価は単なる点検作業ではなく、学校全体が学び続ける組織であるための大切なプロセスです。教職員一人ひとりが自らの課題に真摯に向き合い、組織として継続的に成長していく姿勢こそが、本校の教育力を支える基盤となります。初等部は、関西学院の全人教育の土台を築く場として、児童の未来に大きな責任を負っています。だからこそ、教職員と保護者が同じ方向を向き、子どもたちの可能性を最大限に引き出す環境づくりに力を尽くしてまいります。学校評価の結果は、次ページ以降で項目ごとに詳しく報告するとともに、ホームページでも公開し、社会に対して透明性を確保しながら信頼の向上に努めてまいります。

今後も、建学の精神に根ざした教育をさらに深化させ、児童が自らの使命を見だし、未来へと力強く歩んでいける学校づくりを進めてまいります。

2026 年 4 月 22 日

関西学院初等部
部長 福万 広信

学校評価

教育理念・使命・目標

【教育理念・使命】

キリスト教主義に基づく全人教育の「はじめの一步」を担う。

【目標】

キリスト教主義教育を土台とした「建学の精神」を体得し、スクールモットーである“Mastery for Service”の実現をめざし、知性・情操・意志を備えた児童を育てる。

【初等部聖句】

「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」

[意志]

[知性]

[情操]

2025 年度の評価項目

- ・キリスト教主義教育
初等部の教育の根幹をなすものであるため、評価項目として設定した。
- ・教育課程・学習指導・学校行事
教育理念にふさわしいカリキュラムを編成するために、この項目を設定した。
- ・生徒指導
児童が安心して生活できる学校づくりをめざしているため、この項目を設定した。
- ・研修（資質向上の取組）
より質の高い授業の実現を図るため、毎年の評価項目としている。

2025 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育 【キリスト教主義に基づく、たくましい生き方の育成】
目標	建学の精神に基づき、キリスト教主義教育を初等部のあらゆる教育活動の中で展開し、児童がキリスト教の精神やスクールモットー“Mastery for Service”の精神を体得できるようにする。そのためにすべての教員、また保護者がその精神について共通理解をもち児童に向き合えるようにする。
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>（具体的な取組の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎朝のチャペルでの礼拝、クリスマスや花の日などの特別な礼拝、児童が担当する児童礼拝、クラスで行う昼礼や終礼などの礼拝を行い、創立者たちの思いを継承しながら礼拝を大切に守った。 ・全学年週 1 時間の聖書科授業や様々な教育活動の中で、児童・教職員が建学の精神やスクールモットー“Mastery for Service”を共有し、キリスト教主義教育を展開した。 ・児童宗教委員会が特別礼拝の司会を行ったり、クリスマス献金に関わったりすることで、児童が主体となった宗教活動を行った。また、クリスマスの降誕劇の実施方法について話し合い、児童自身が内容を決定した。 ・キリスト教主義教育の理念を保護者と共有する機会である全保護者対象の「聖書講座」（年 3 回開催）、PTA 活動との連携による「聖書と讃美歌に親しむ会」（各学年ごとに年 1 回、計 6 回開催）を実施した。 ・教職員対象の研修会では、聖書科授業の授業研究を行い、キリスト教主義教育への理解を深めるとともに、その担い手として子どもたちにどのように関わる

	<p>かについて考える機会とした。 (取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童アンケート問 2「こころの時間や聖書の時間は、あなたにとって大切な時間だと思いますか」に対する肯定的な回答は、前年度の 83.9%から 85.6%へと 1.7 ポイント上昇した。また、児童アンケート問 3「“Mastery for Service” (マスタリー・フォア・サービス) を大切にすることを心がけて生活していますか」に対する肯定的な回答も、前年度の 86.4%から 88.3%へと 1.9 ポイント上昇した。これは、聖書科担当者が授業の中で、聖書の時間の大切さや “Mastery for Service” の意味を意識して指導を行った成果であると考えられる。 ・これに伴い、児童アンケート問 17「思いやりのある友だちが多いですか」に対する肯定的な回答は前年度より 3.6 ポイント、問 19「友だちの意見や考えをよく聞いていますか」は 6.5 ポイント、問 20「相手の気持ちを考えて行動することができていますか」は 3.3 ポイント、それぞれ上昇している。 ・一方、問 18「友だちが困っていたら助けていますか」に対する肯定的な回答は前年度より 1.9 ポイント低下した。このことから、思いやりを大切にしようとする意識は高まっているものの、実際の行動として十分に表れていない面もあると考えられる。 ・保護者アンケート問 3「学校は、キリスト教主義教育の理念について保護者と共有する機会を設けている」に対しては、肯定的な回答の割合が 99%となり、前年度同様に高い数値を維持している。全保護者対象の「聖書講座」(年 3 回)や、学年ごとに実施している「聖書と讃美歌に親しむ会」(年 6 回)などの取組が評価されているものと考えられる。 ・また、保護者アンケート問 4「学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている」に対する肯定的な回答は 93.9%となり、前年度より 2 ポイント上昇した。さらに、問 22「学校は、“Mastery for Service” を体現する世界市民の育成につながる教育を実践している」に対しても、肯定的な回答は 91.3%となり、2.4 ポイント上昇している。これらの結果から、子どもたちの姿や学校の様々な取組を通して、保護者がキリスト教主義教育の浸透を実感していることがうかがえる。 ・保護者アンケート問 20「私は、関西学院のスクールモットーが “Mastery for Service” であることを知っている」、問 21「私は、関西学院のスクールモットー “Mastery for Service” に共感している」に対する肯定的な回答の割合はいずれも 100%と高い数値を示している。一方で、A 評価の割合はそれぞれ 8.9 ポイント、6.7 ポイント低下している。今後も、関西学院が “Mastery for Service” をスクールモットーとして掲げている意義について、保護者に継続して伝えていく必要がある。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・聖書科の授業に加え、こころの時間の礼拝においても、礼拝や聖書の大切さについて語り、“Mastery for Service” について考える機会を大切にしていく。 ・児童が心を込めて賛美することができるよう、讃美歌の歌詞の意味について理解を深める機会の充実を図る。 ・保護者対象の講座において、保護者自身が “Mastery for Service” の精神に生き、その理念を体現することの意義について理解を深める機会とする。 ・教職員がキリスト教主義教育の理念を共有する機会を設け、聖書の言葉に親しみながら “Mastery for Service” について考える時間の充実に努める。

2025 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

<p>評価項目 【テーマ】</p>	<p>教育課程・学習指導・学校行事 【真理を探究する確かな学力の育成】</p>
<p>目標</p>	<p>「キリスト教主義に基づく全人教育による人間形成」を念頭に「各教科の特性や児童の興味・関心に応じた教育課程の工夫」また、「学力の的確な把握の上の学習指導」「豊かな情操を育む芸術文化活動」を目指す。</p>
<p>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</p>	<p>(具体的な取組の状況)</p> <p>特別活動（児童会活動・クラブ活動）について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校行事に児童がより主体的に取り組めるよう、児童会活動の場で児童の意見を積極的に聞くようにした。体育祭では児童の意見を反映し、前年までの形を大きく変更した。 ・児童会活動を精選し、必要な活動を新設するなど、児童会活動の見直しを行った。見直しにあたっては、翌年度に6年生となる5年生から意見を集め、児童にとって「本当に必要だと思う活動」「やってみたいと思える活動」となるようにした。今年度に検討した変更は、2026年度より実施する。 ・児童の「やりたい」が実現する活動となるよう、クラブ活動のあり方を見直した。翌年度に6年生となる5年生の意見を集め、クラブの設立段階から児童に委ねる形とした。2025年度中に2026年度のクラブを設立し、5年生は自分たちが設立したクラブへの勧誘を3・4年生に向けて行った。 <p>異学年交流について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童会活動（代表委員会）で出されたアイデアを基に、「なかよし班（1～6年生各1名で構成される6名の班）」での活動を拡充した。具体的には、週に一度なかよし班でランチを共にし、その後に校内清掃を行った。また、これまで学年で実施していた「誕生日を祝う会（カレーランチ）」を、なかよし班で行う形に変更した。 ・児童会活動（体育委員会）で出されたアイデアを基に、体育祭の競技の見直しを行った。誰もが安心して参加できる体育祭とするため、出場する競技を選択できるようにした。また、異学年交流を深めるため、学年対抗で行っていた競技を、2学年混合のチーム編成で行う形に変更した。 <p>英語・国際理解教育について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3年生はインドネシア、4年生はオーストラリア、5年生は台湾、6年生は韓国の児童・学校と交流授業を実施した。特に台湾・韓国とは、双方の学校を訪問し合うことで交流を深めた。また、引率教員の人数を増やし、5年生の台湾訪問および6年生の韓国訪問に参加できる児童数を拡大した。 ・毎日英語に触れる機会を確保するため、今年度も1・2年生は毎日20分の英語授業を実施し、3～6年生は週3コマの45分授業と週2コマの20分授業を行った。 <p>教科学習について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語・算数・社会・理科の4教科で教科部会を実施し、期末テストの内容について検討を行った。期末テストの検討を通して、各教科の特性や学年ごとの系統性を確認した。 ・国語・算数・理科の部会では、全国学力・学習状況調査の結果を分析し、改善点や課題を全体で共有した。

	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の自主性を育てるため、授業の開始と終了を知らせるチャイムを廃止した。 ・保護者に児童の日常の様子をより見てもらえるよう、半日間自由に校内を参観できる「半日参観」を実施した。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童アンケート問1「学校は楽しいですか」では、肯定的評価が昨年度の85.8%から今年度は90.8%へと5ポイント上昇した。また、最も大きく向上したのは問12「困ったときに、友だちや先生に相談できますか」で、昨年度の57.2%から今年度は69.8%へと12.6ポイント上昇した。これらの結果から、より過ごしやすく、より学びがいのある学校づくりを児童の意見を踏まえて進めてきたことが成果として表れていると考える。児童の主体性・自主性を育む学校、そしてより民主的な学校を目指し、今後も可能な限り児童の声を尊重しながら学校づくりを進めていく。 ・児童アンケート問4「授業では、新しいことをたくさん知ることができますか」と問5「授業は楽しいですか」は、どちらも昨年度より2.5ポイント上昇した。肯定的評価はいずれも90%近くに達しており、児童にとって学びがいのある授業となっていることがうかがえる。一方で、問7「授業では、自分から進んで、友だちと話し合ったり、考えたり、まとめたりしていますか」は肯定的評価が80.6%で、昨年度より2.4ポイント低下した。授業の進め方、単元の構成、総合的な学習の時間の扱い方などに改善の余地がある。 ・児童アンケート問8「英語の時間は好きですか」では、肯定的評価が昨年度より1.3ポイント上昇した。ただし肯定的評価が64.5%にとどまっており、課題が残る。英語については保護者アンケートでも厳しい結果が見られ、問11「学校は、英語教育を通して、英語によるコミュニケーション能力を育てるとともに、基本スキルを定着させている」の肯定的評価が81.8%にとどまった。これは英語・国際理解教育における課題であると同時に、改善への期待の表れでもある。各学年の国際交流のさらなる充実や、習熟度別指導を含む英語授業のあり方について検討を進めていく必要がある。 ・保護者アンケートの問8「学校は、基礎的知識や技術が定着する授業を行っている」は89.9%、問9「基礎的知識や技術を活用する場面を取り入れた授業を行っている」は88.2%、問10「楽しく分かりやすい授業をするために工夫をしている」は93.2%と、いずれも昨年度より肯定的評価が向上した。一方で、「強くそう思う」という回答は50%以下にとどまっており、授業改善に向けた余地はまだ大きい。引き続き授業研究やカリキュラム開発を一層推進していく。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教科の本質をとらえた上質な授業を実現するため、教科部会や教員研修を一層充実させていく。本校に必要な授業時数を精査し、標準授業時数にとらわれない柔軟なカリキュラムを開発していく。 ・総合的な学習の時間のテーマを「世界市民」とし、学年の発達段階に応じたカリキュラムを構築する。教科で身につけた見方・考え方を活用し、探究のプロセスを意識して学習を進める。 ・児童の主体性・自主性を育むため、児童会活動やクラブ活動を可能な限り児童に委ねる。 ・児童の社会性やコミュニケーション力を育成するため、「なかよし班」での学級活動やイベントの実施など、異学年交流をさらに充実させる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・英語・国際理解教育については、習熟度別授業の導入を含めて授業のあり方を検討し、国際交流のさらなる充実を図る。 ・オンラインゲームやSNSに関する理解を深めるため、保護者・教員を対象とした講座を開催する。
--	---

2025 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	生活指導 【初等部に関わる全ての人々が楽しく幸せに過ごせる学校生活】
目標	児童が社会の一員として責任ある態度を持ち、学校生活のきまりを守ることができるようにする。そのために、学年の発達段階に応じた自己判断を促すようにする。
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活安全委員会の児童と連携し、4 つの重点項目（時間の遵守・物の管理使用のルール・場所の使用マナー・みだしなみ）について、朝のこころの時間で全校児童に呼びかけを行った。 ・生活安全委員会の児童による朝の挨拶運動を実施し、挨拶の大切さを説明した上で挨拶活動を推進した。 ・PTA サポートによる立哨を実施し、児童が安全に登校できるよう声掛けを行ってもらった。 ・教員による立哨を毎週火曜・木曜に実施。土曜時程や特別行事等の一斉下校時には担任団が記念館前までの下校指導を行い、学事委員はホームで指導を行った。 ・登校時に宝塚南口駅に絞り、1 学期の間全教職員と共に朝の登校時刻に合わせて、宝塚南口駅改札付近で立哨を定期的に行った。 ・部長室会・教師会・職員朝礼で日々の生活指導案件や児童の様子を共有し、全員で生活指導に当たる意識を高めた。 ・避難訓練は、火災（11 月）、地震（1 月）の 2 回、様々な災害に備えて行った。地震避難訓練は、当日、実施時刻を知らせない形で訓練を行い、不測の事態にどう対処すればよいか考えられる訓練とした。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <p>〈児童アンケートの結果から〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活指導の観点である「学校のきまりを守ること」について、児童アンケート問 14「学校のきまりを守って生活していますか。」に対する肯定的な回答は 87.9%（昨年度 84.2 %、一昨年度 87.0%）であった。この項目に関しては 昨年度を 3.7 ポイント、前々年度を 0.9 ポイント上回る回答を示しており、児童の意識の向上が見られた。しかし、実際の公共交通機関での児童の登校・下校姿勢を見る限り、意識が向上したとは必ずしも言えない。 ・生活指導の観点である「元気よく挨拶をすること」について、児童アンケート問 15「だれにでも元気よくあいさつしていますか。」に対する肯定的な回答は 88.5%（昨年度 89.3%、一昨年度 83.4%）であった。この項目に関しては昨年度を 0.8 ポイント下回る回答を示しており、児童による朝の挨拶運動や全体の場での呼びかけを行ったが、児童の意識向上にはつながったとは言い難い。 <p>〈保護者アンケートの結果から〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケート問 15「学校は、集団生活に関するルールやマナーについて、適切な指導をしている。」に対する肯定的な回答は 84.8%（昨年度 83.6 %、

	<p>一昨年度 86.2%) であった。昨年度に比べて 0.8 ポイント上回っているが、児童アンケートの同様の項目の回答から考えて、保護者は、児童本人ほどルールやマナーが徹底されていないと感じていることがわかる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケート問 16「学校は、しっかりと挨拶ができるように指導している。」に対する回答は 83.1% (昨年度 82.8%、一昨年度 81.5 %) であった。昨年度から 0.3 ポイントの微増になっており、「あいさつ」に関しては、児童アンケート問 15 同様、児童の意識が保護者にも伝わっていることがうかがえる。 <p>〈教員アンケートの結果から〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員アンケート問 13「私は、挨拶や時間厳守など、社会生活をする上での基本的なマナーが児童に身につくよう適切に指導している。」に対して、96.4% (昨年度 100%) の肯定的な回答が見られたが、教員自身も徹底した指導ができていないと感じる教員がいることと、児童や保護者における同様のアンケートに対する回答では、10 ポイント以上の差があり、教員の指導が児童には十分行きわたらず、すべての教員の徹底した指導の必要性を感じる。 ・教員アンケート問 14「私は、命の大切さや良好な人間関係をつくることなどについて、学校生活の中で指導している。」問 15「私は、児童間の人間関係を円滑にするための配慮、指導をしている。」問 16「私は、一人ひとりの子どもが安心して学校生活を送れるように、配慮、指導している。」は、肯定的な回答が 96.4%以上であった。しかしながら、児童アンケート問 16「学校で、命の大切さやなかまの大切さなどについて学んでいますか。」問 17「思いやりのある友だちが多いですか。」問 18「友だちが困っていたら、助けていますか。」に対する肯定的な回答が、どれも 90%前後であったことから、指導を行ったが、児童にしっかりと伝えきれなかった現状がある。引き続き学校全体で共有しながら指導を行っていく必要がある。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校のきまりを守ること」に関しては、4つの重点項目（時間の遵守・物の管理使用のルール・場所の使用マナー・みだしなみ）を中心に、教員の指導に差異がないように、部長室会や教師会で繰り返し児童の実態を伝えつつ、事前に全員で指導ができるように働きかけていく。同時に教員からの指導と委員会児童からの呼びかけを併用しながら、さらに児童の意識を高められるように活動していく。また、保護者にも教育講座などを活用し、積極的にアナウンスをしていく。 ・「良好な人間関係」や「児童が安心できる学校生活」に関しては、アンケートの結果を教員全員で共有し、学級内での指導だけで終わらせることなく、学年でのかかわりを増やし、また縦割り活動なども通して異学年の児童のかかわりを増やすことで児童が安心できる初等部であることを認識できるよう、サポートしていく。 ・「あいさつ」については、あいさつをすることは、お互いの心を通わせるファーストパスであることを児童に指導してだけでなく、教員同士の積極的な挨拶を校内で行うことで、初等部全体の文化として根付かせていきたい。

2025 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

<p>評価項目 【テーマ】</p>	<p>研修（資質向上の取組） 【“Mastery for Service” の体現 ～「個」が活きる関わり合い～】</p>
-----------------------	---

目標	<p>教員の対話と共創の場づくりを行い、教員の絶えざる変容によって、スクールモットーを体現する初等部の子どもたちの育成をめざす。</p>
<p>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</p>	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内授業研究では、キリスト教研修と兼ねた「大授業」を聖書科で実施。事前検討会は学年で行い、事後研修会は全教員が参加。その他、全教員が「小授業」を実施。学年ごとに行う「小授業」では、学年で検討会を行った。 ・危機管理研修では、外部講師による救急措置に関する講話を聞き、日常でできる具体的対応方法を確認した。 ・若手研修では、授業技術のスキルアップや教師としてのあり方を確認できるよう、若手同士のコミュニケーションが図れる場とした。 ・人権教育研修では、学年で気になる児童を取り上げ、その児童について人権教育の観点から学年で共通の理解を図った。 ・教科部会では、教務委員会と連携を図りながら各教科の部会を開催し、各教科についての理解（資質・能力、評価等）を深めた。 ・部会研修では、教員がそれぞれに興味のある研修から3つの部会「カリキュラム・マネジメント部会」「多様性・特別支援教育部会」「児童理解・学級経営部会」に分かれ、外部講師の招聘や討議会や読書会を実施した。 ・学校公開会では、学年ごとに公開授業を行い、参会者には同じ学年で複数の授業を見ていただいた。そうすることで、学年で気になる児童について「関わり合い」がどのように「個」を活かすことになっていたのかについて意見をいただく機会をもつことができた。 <p>(取組の効果に対する評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童アンケート問4「授業では、新しいことをたくさん知ることができますか。」問5「授業は楽しいですか。」問6「授業はわかりやすいですか。」に対する肯定的評価（「とてもわかりやすい」「わかりやすい」）は、91.2%、87.3%、84.2%と昨年度（88.7%、85.3%、86.4%）と同様に高い水準で維持されている。一方で、問8「『英語』の時間は好きですか。」問9「『英語』の時間の勉強はわかりやすいですか。」問10「『算数』の時間は好きですか。」については、肯定的評価は64.5%、74.5%、76.5%と問4～6と比較して低いポイントになっている（昨年度63.2%、73.6%、75.1%）。他の教科に比べて、英語と算数の授業改善が急がれる。 ・児童アンケート問7「授業では、自分から進んで、友だちと話し合ったり、考えたり、まとめたりしていますか。」について、肯定的な評価が80.6%と、問4～6の肯定的評価からすると物足りなく、昨年度の83%からも少しポイントを下げている。本校の研修のテーマである「関わり合い」の観点から考えると、見直しが必要であると言える。 ・保護者アンケート問10「学校は、楽しく分かりやすい授業にするために工夫をしている。」では、93.2%と肯定評価が昨年の91.2%と同様に高い水準にある。これは、各教員の授業がそれぞれの児童に応じて工夫された楽しいものであることが、参観授業や家庭での会話から保護者に伝わっていると言える。一方で、問8や問9のように「基礎的知識」を問う質問では、肯定的評価が89.9%、88.2%と昨年度（87.5%、86.3%）より若干上昇しているものの、問10と比較して少しポイントが下がる。また、問11の英語のコミュニケーション能力・基本スキル、問12の算数の数理的に考える力・基本的な技能を問う質問では、81.8%、87.2%と、これらも少しポイントを下げている。英語科と算数科を中

	<p>心として、基本的な技能を身につけるような授業改善をしていく必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員アンケート問 17「私は、研修部の教員研修計画に基づき、授業研究や公開授業を実施している。」について、肯定的評価が 85.8%と昨年度の 77.4%から増加している。問 18「私は、授業研究や公開授業を通して、自身の授業力の向上に努めている。」については、肯定的評価が 82.1%（昨年度 83.9%）と微減している。ポイントだけ見ると高い水準のように見えるが、5人から7人の教員が自身の授業研究・授業力向上について否定的に捉えている。全ての教員がこれらの評価を肯定的にしてもらえるように研修の内容・方法を見直す必要がある。 ・教員アンケート問 9「学校は、英語教育を通して、英語によるコミュニケーション能力を育てるとともに、基本スキルを定着させている。」問 10「学校は、算数の時間を通して、日常の事象を数理的に考える力を育てるとともに、基本的な技能を定着させている。」問 11「学校は、音楽、美術（図工）を中心とした芸術教育を通して、児童の豊かな感性を育てている。」に対する肯定的評価が 50%台から 70%台と、厳しい評価になっている。さらに、否定的な評価の中でも、「まったく思わない」と回答する教員がいる現状を、その教科を担当しているしていないに関わらず、全ての教員が自分事として危機感をもちながら教科教育に取り組む必要がある。
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが授業を「楽しい」「価値がある」と実感できるよう、授業づくりにおける学びの目的や意味付けの共有、および学習活動への主体的な参加を促す授業デザインに関する研修を深化させると共に、基礎的・基本的と言われるような技能の習得を図ることのできる授業を、英語科や算数科を中心に取り組む。 ・「関わり合う」ことを授業においても日頃の生活においても、常に意識できるような環境を整える。また、生活科や総合、学級活動などの横断的な指導を担う視点を強化する。 ・教員の授業力向上に対する内発的な動機づけを高めるために、授業公開や研修を「義務的な印象」ではなく、「学び合い・高め合い」の場として位置づけ直す工夫（テーマ設定・形式の見直し等）を行う。 ・研修の目的やテーマを明確に設定したうえで、そのねらいや目標が児童の成長にどのように関係しているかを可視化し、全教員が共通理解をもって参加できるようにする。 ・年間を通して、一人ひとりの教員が少なくとも一回は自身の授業を見直し・共有・改善する機会を持てるよう、計画的な授業公開の場やリフレクションの仕組みを取り入れる。 ・教務委員会や研修委員会、教科部会等の横断的な連携を通して、評価方法や授業内容の改善方針を全体で共有する仕組みをさらに強化する。 ・教員間の情報格差やスキル差への配慮として、研修後の実践フォローアップや少人数制の意見交換・振り返りの時間を設けることで、教員の資質向上をより実効的に支援する。

総合評価

- 礼拝や聖書科、宗教委員会の主体的活動を通じ、“Mastery for Service”への意識や傾聴の姿勢が向上した。保護者との理念共有は極めて高い一方、高まった意識を実際の「困っている友を助ける」行動へ結びつける指導と、教職員間での更なる理念共有が今後の課題である。
- 児童会やクラブ活動を児童主体へ見直したことで、学校への満足度や相談しやすさが大きく改善した。国際交流も進展したが、英語の定着や授業内での自発的な協働学習の質の向上については、

改善項目として残っている。

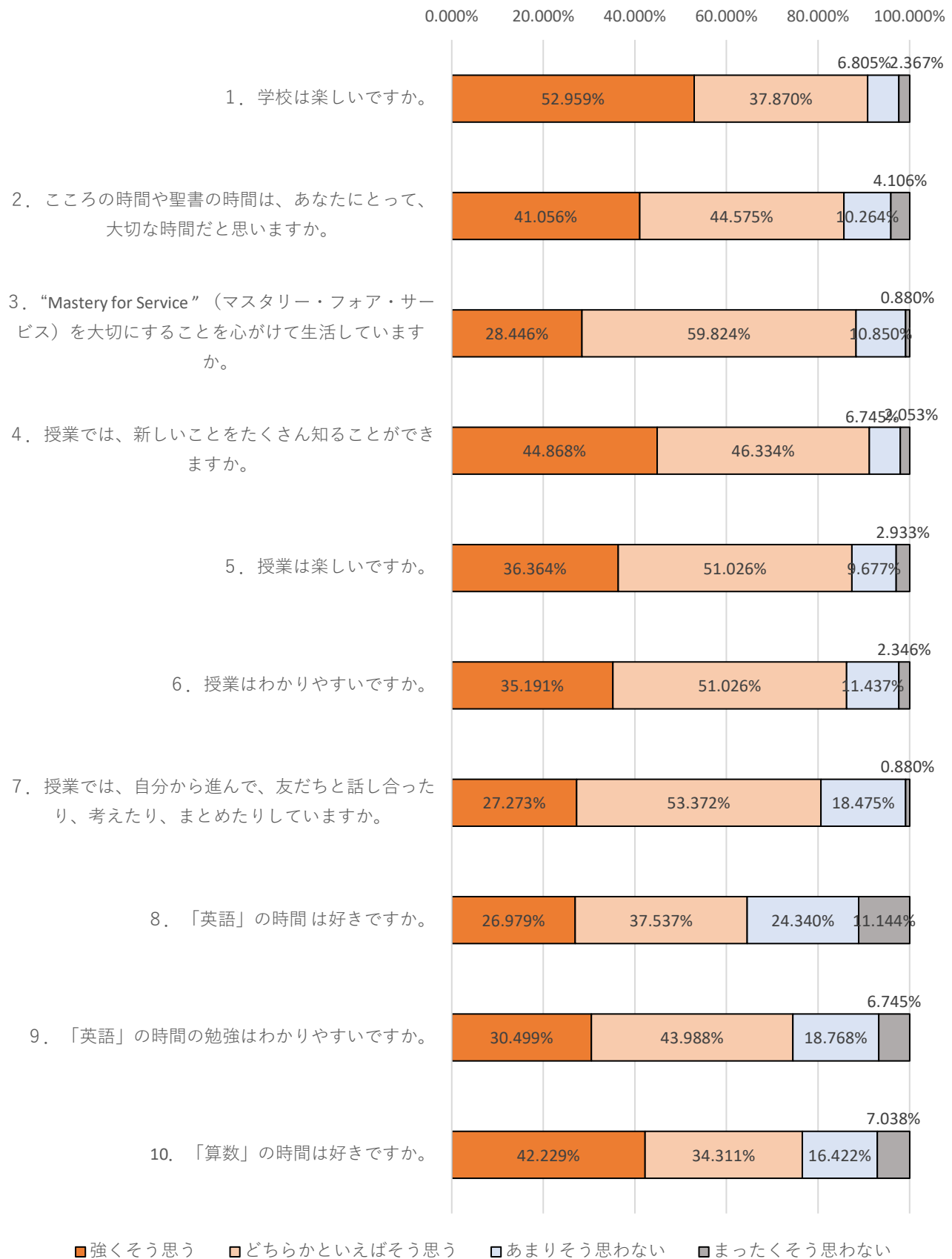
- 委員会連携や避難訓練を通じ、安全・規律意識の向上が見られた。挨拶等のマナーについて、教員間での指導の統一性を高めるとともに、家庭とも連携した粘り強い指導を継続する必要がある。
- 多彩な授業研究により授業の質が維持されている。今後も研修を義務的な場ではなく教員同士の「学び合い」の場として再構築し、全教員が主体的に授業改善に取り組む体制を強化する。
- 児童の声を尊重した学校づくりが着実に成果を上げている。今後も課題に真摯に向き合い、教職員一丸となってキリスト教主義に基づく全人教育を推進し、「世界市民」の育成に邁進する。

2025年度の評価をふまえて2026年度に予定している評価項目、テーマ等

- キリスト教主義教育
- 教育課程・学習指導・学校行事
- 生徒指導
- 研修（資質向上の取組）

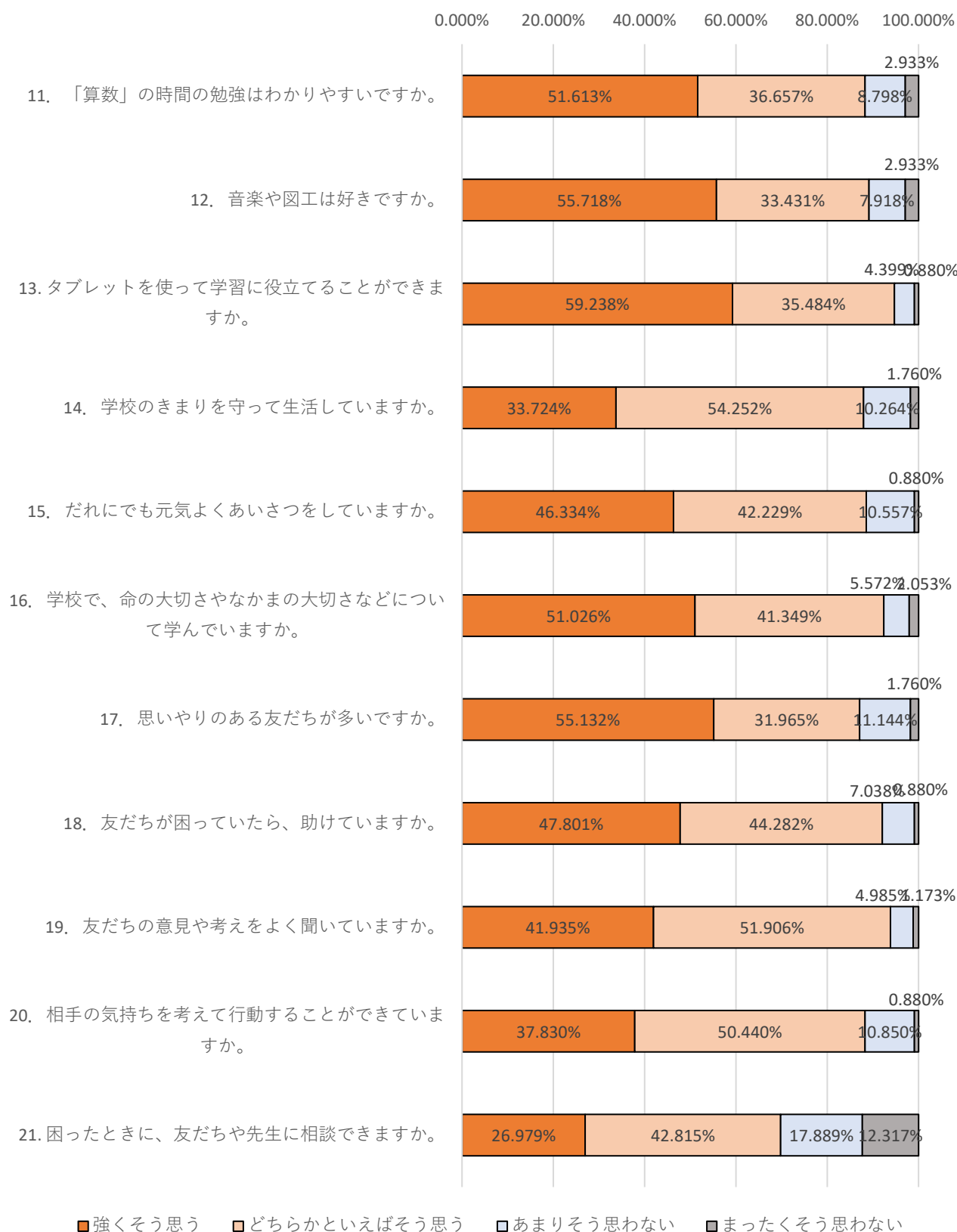
2025年度学校評価アンケート集計結果

初等部・児童（回答率96%回答341人/対象356人）



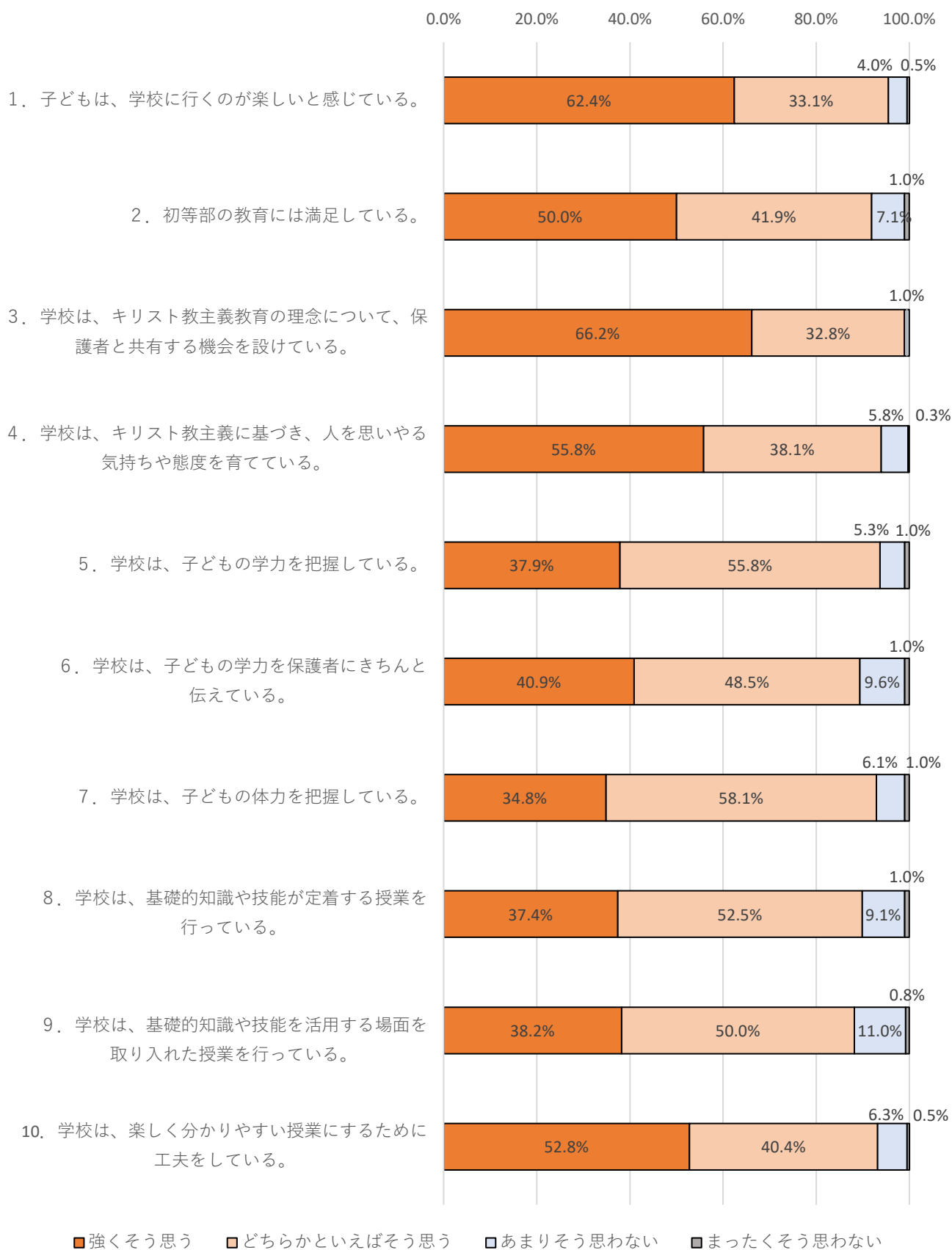
2025年度学校評価アンケート集計結果

初等部・児童（回答率96%回答341人/対象356人）



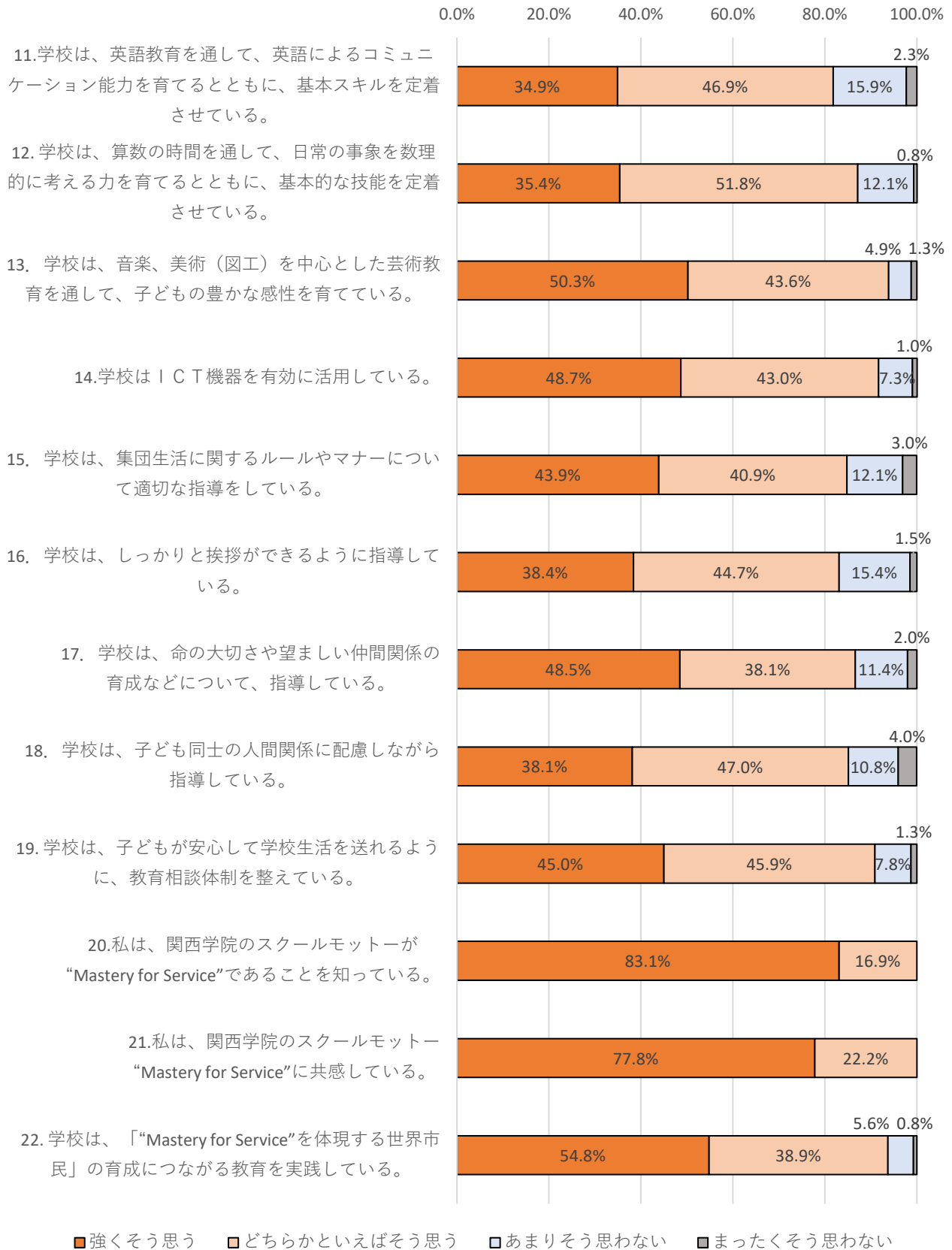
2025年度学校評価アンケート集計結果

初等部・保護者（回答率74%回答396人/対象535人）



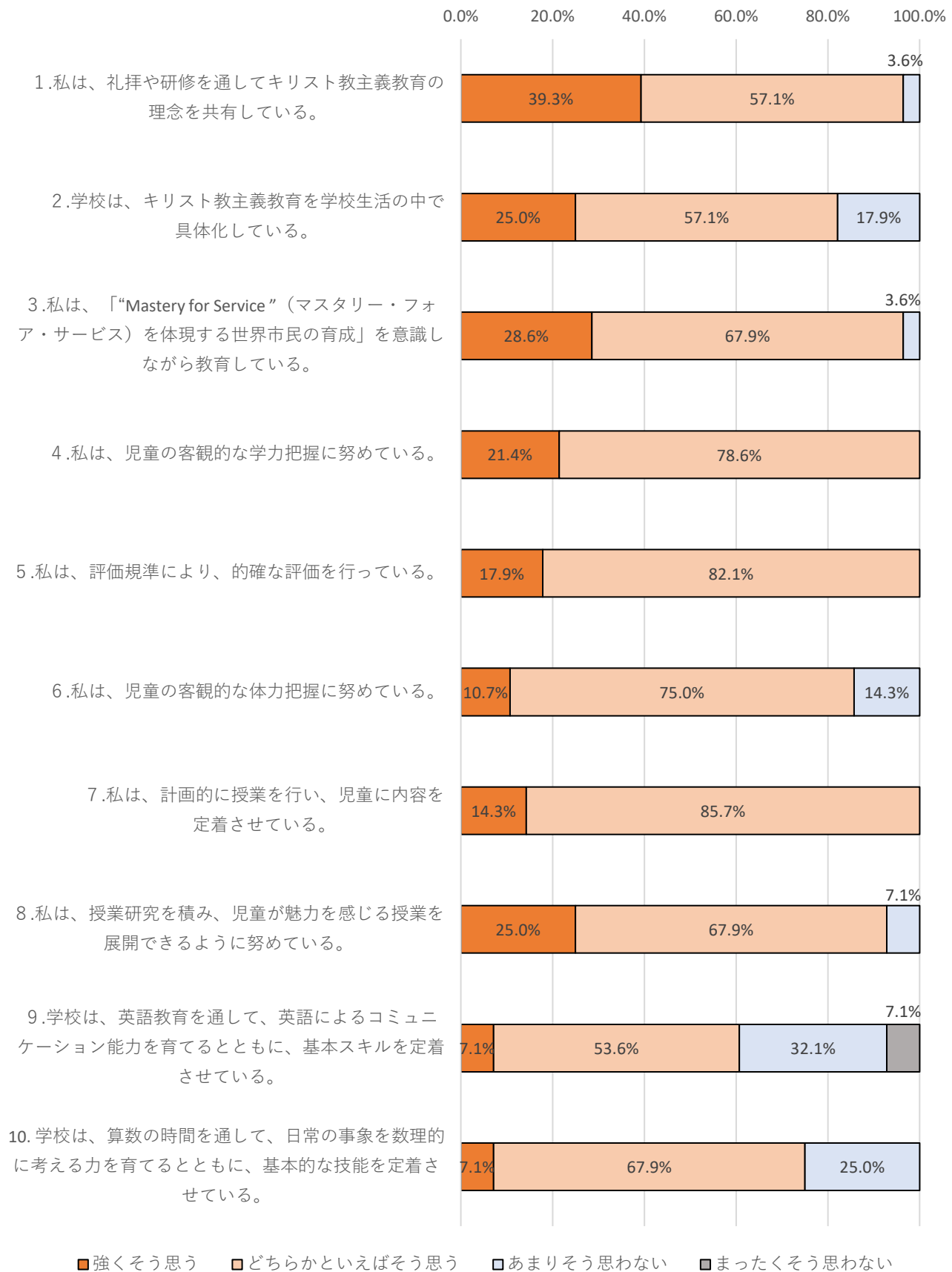
2025年度学校評価アンケート集計結果

初等部・保護者（回答率74%回答396人/対象535人）



2025年度学校評価アンケート集計結果

初等部・教員（回答率91%回答29人/対象32人）



2025年度学校評価アンケート集計結果 初等部・教員（回答率91%回答29人/対象32人）

